

合つていこうではありませんか。

私の修法による教化

—— 体験を通して ——

植 田 観 泰

(大阪・真如寺住職)

一、私の信仰体験

昭和二十七年、私が初行を成満した年の六月十七日午後三時頃のことであった。自坊真如寺の事務所で寺務整理していた時、突然ことばでは表わせない状況に自身陥ってしまった。眼前の日朝上人堂や参道、山や竹やぶ、殊には私自身が一幅の絵の中の存在と化してしまったように感じられた。そして参拝者の打つ太鼓の音、木杵の音が、腹立たしくてたまらぬ気分なのである。妙な感じで、自分でどうなったのかわからない。普通ではないとさとり、直ちに滝へ行つて水行したが、それでもはつきりしない。高い石垣の上を通りかかると、ついにはそこから下へ飛びこみたい衝動にかられる。ともかくにも、

御本尊の前に坐して一心に唱題し、ことの解明を念じた。「死の術を授ける」との言葉が聞えたが何のためか解せぬため、なお理由をおしらせいただくべく念じていると、つむつているまぶたに二人の改良服を着た女性が現われ、私を案内してくれた。そこは境内にある古い池であった。早速、現実にもその場所へ行つてみると、古い池の地表面がすっかりコンクリートで塗り固められていた。

その年まで私は京都蓮久寺に住職について全く知らなかったのであるが、私は能勢真如寺へ帰る前に、その古い池はコンクリートでふさがれてしまった。そのためここを住居としていた霊（龍神様）が住居を失い、その怒りのお知らせが私に來たと受取り、早速精進して一日寿量品三十六巻を読誦し、三週間お詫びすることとした。三週間の終り頃には私の症状も戻り、その場に龍神様をお祀りして今日に至っている。

私はそれまで、霊界のことについては関心がなかったのであるが、その私の脳天に大きな鉄槌を振りおろされた思いで、はじめて不思議な霊界の存在を知ることがで

きたのである。

いまひとつ私の体験を述べると、再行を成満した夏の夕刻のことであった。本堂で夕勤して終った時、子供がただならぬ大声で泣いて帰って来た。どうしたのかと急いで庫裡へ行くと、頭を打ったとのこと。兄の方が、遊びに来ていた友だちに誘われて、鬼子母神様のお堂の屋根に雀が巣を作っているの取ろうとして、お堂の欄干にあがった。弟も欄干にあがってさかさまにコンクリートの地面に落ちたのである。みると頭の陥没骨折である。家内もびっくりして、早速病院へ連れて行った。当時、子供はまだ幼稚園へ行く前で四歳ぐらいであったが、診察の結果は、すぐ手術しなくてはいけないとのこと。しかも手術すれば、大丈夫かどうかは保証できないという。そこで別の病院へ行ってみたが、同様の診察結果である。手術するか否か。私としてはいづれかを返事しなくてはならない。

私はその時、はじめて意を決した。「自分の子供一人、修法によってなおすことができずして、人の修法ができ

ようか」と。そこで院長さんには、何か症状が起こった時に手術していただくようお願いした。「症状が起きてからでは遅いので、早期の手術を勧めるのだが、それでは早く発見するために一週間に一回連れて来なさい。検査をしましょう」と、一応院長さんの諒解を得て薬をもらって帰った。

その日から一年間、毎日寿量品三十六巻、鬼子母神様に子供の平癒を祈願して行に入った(私が真如寺住職になる前のことである)。家内は毎週病院へ連れていく。ひと月、ふた月たち、三月経っても変った症状はない。月に一回の検査でよいとなり、一年経過、異常なし。三カ月一度の検査となり、最終的に、大丈夫との結果を得た。以来、子供は幼稚園・小学校そして大学にも支障なく進み、今日に至っている。

私の読誦行は、一年終ったのちも今日まで暇があれば、否、できる限り時間を作って読誦行をしているのであるが、この様な小さな体験ではあるが(親にとっては実に真剣なものである)、大聖人の「法華経の行者の祈りの叶わぬ

ことあるべからず」との『祈禱鈔』の御文、仏力・法力・信力・念力の相応するところ必ず仏天の守護のあることを、身を以って体験させていただいた。そして自行、殊に読誦行が如何に大切かを知った。これは今日までの私の修法の基本的な信念となっているところである。

こののちも、加行を重ねるにしたがって、種々不思議なことを体験させていただき、この御恩を何とかして仏祖三宝・諸天におむかえしなくてはならないと思い、この報恩の気持が自然と修法によっての方向へと進んできたのである。

私は修法を通じて妙法広布のお手伝いをさせていたでけることを喜びとし、また宗祖から私に与えられた使命とも受けとめて、それ故、今日まで修法一本にきたものである。

二、修法の目標と修法師の心構え

私は、修法は妙法広布のための手段であると認識している。人間にはさまざまな願望がある。その願望を満足させるものが修法である。それ故、教線拡張のためには

最も効果的な布教法であり、修法師が期待される所以もここにあると思うのである。しかし願望を満足させるものであるだけに、また神秘的な要素が強いものであるために、そのみを目的としてしまう傾向に陥りやすいものでもある。こうなつては、単なる欲望を満たすための宗教となつてしまい、法華経の教え、宗祖大聖人の理念に反するものとなる。

本来、修法の目標とするところは、他ならぬ妙法蓮華経による「一切衆生悉皆成仏」と心得るべきである。修法による願望の成就を通して、その人が本仏の大慈悲心を感じ、法華経に帰命するべく導いていくことが肝要であると思う。

そこで修法にあつては、修法師の不断の自行（読誦行）の蓄積がまずもつて必要であり、その上に立つて、修法師自らが如来の使いとしての大慈大悲の心に住し、無欲であることが大切である。

なお、修法と並行して言説布教というか、対話説法をすることも大事なことである。修法をより効果あらしめ、

眞の信徒たらしめるためである。

大聖人のお言葉に、「思い合わぬ祈り」とあるが、まずもつて修法を受ける者と、祈る修法師共々に法華經を信じ祈るものでなくてはならぬもので、これを説くことは修法をする上で欠くことができない。

また信者の中には、どこそこの妙見様は効かないが、能勢の妙見様は効く。どこそこの七面様は効かないが、能勢の妙見様は効く、などと言う者がいる。しかし信仰は薬とはちがうもので、効くとか効かないとかいうものではない。お願いする守護の神様を定めて迷うことなく、本門の本尊に対する信仰をもつて一心になることが肝要で、あちらの神様、こちらの神様にお願ひしておいて、どこかの神様にひつかかるだろうというような信仰はいけない。

これもまた修法と同時に説き示すべきことである。病氣平癒のご祈禱は全快して悪業をなすためのものではないし、同様に商売繁昌のご祈禱も、菩薩行をなすため、一分は世のため人のためになるよう功德を積むこと――

つまりお題目の輪をひろげるお手伝いをさせてもらうための祈禱であることを説く必要がある。一例であるが、かようなことについて修法と並行して言説による布教をすることが肝要である。

言説布教によつて眞の信徒にするのでなければ、願望の出た時だけのお願ひ、お詣りとなつてしまい、医者か薬屋あるいは易者と同じこととなる。信仰の必要なこと、信仰の有難いこと、信仰の仕方等を教化し、不断の信仰をもつてその人自身法華經の実践者として眞の信徒たらしめるようにしなくては、修法の意味はないと思う。

そのためには、言説布教（対話説法）のできる修法師でなくてはならない。修法師は勉強し、学にも明るくなくてはならない。

三、修法布教の銚先を団地へ

個人の祈りにも、すでに檀信徒となつている者と未信徒がある。未信徒に対する修法布教を速やかに団地へ向けるべきと思う。団地は選挙等にも浮動票が多く、ここでの取得数によつて当落決定される程重要な場所であ

る。家族制度が変わってまだまだ核家族がふえつづけ、信仰を持たぬ人が多く、寺院・教会も少ない。葬式も葬儀屋に一任して、適当に近くの寺院へ頼むということも多い。団地布教は重要な課題であろう。

宗門にても団地等の人口過密地帯に寺院・教会の設立がいわれているが、実際問題として、私自身一箇寺建立した経験からみて、新しい宗教法人の設立は難しいことである。結社にしても世話人の届け出・規定等の作成、提出の必要があり、また所在地宗務所の管内に入らねばならない。もつと簡便で小回りのきくような、関係住職から宗務所経由で宗務院へ届け出、日蓮宗何何修法布教所の承認をもらい、年々承認料を納めるような制度の研究が期待される。これによって若い修法師の新たな活動の場も確保されるのではなからうか。

四、信徒の法器養成

各寺院の運営とか事務、あるいは行事等については、檀信徒の中から総代や世話人等が出てやってくれるが、信徒を教化するに当って、いわば信仰の上でのリーダー

シップをとって信徒でこれを担当する、または手伝ってくれる者は皆無に近いのが、現状である。

妙法広布のためには、一人の力より二人の力、二人の力より三人の力が必要とされる。一人の修法師が、個人を対象として一年間頑張って、何人の信徒を得られるであろうか。一人の力には限界がある。その意味で、妙法広布のために協力しお手伝いする信徒の法器を養成することは是非必要と思う。私たち修法師が信者に接近するよりも、それらの人々の方が日常生活において、幅広く未信の人にも接近できるし、相談にもれる。家庭の中深くまで入っても行ける。

私の場合、昭和三十九年以来毎年、法器養成のための行学道場を開設しているが、これらについては、他日を期したい。

以上、時間の関係で要を得ないところも多々あったが、私の体験を踏まえての修法による教化について述べた次第である。自身の体験ということで、独断的なことばかりだと思いが、御叱声いただければ有難い。